浜宮祭

宗像

平成ノ大造営

時満ちて
道ひらく

五月・浜宮祭斎行

　薫風立つ五月五日（こどもの日）、恒例の五月・浜宮祭が、江口区の五月宮と神湊区の浜宮でそれぞれ斎行された。

　当日、神職四名が神湊に鎮座する浜宮へ出向。五月五日は、五節句の一つ「端午の節句」にあたり、浜宮石祠の神前には海川山野の味物に加え、「赤飯」「粽」「ガメの葉饅頭」「菖蒲酒」など、同節句に因んだ神饌が供えられ、午前十時三十分浜宮祭を斎行。当大社責任役員、氏子会長、地元総代、神湊地区の各区長をはじめ地元の方々が多数参列された。

　引き続き、釣川河口の江口に鎮座する五月宮へ移動。五月宮には社殿はなく、大きな常緑樹を依代とする神籬祭場で、その前庭に浜宮祭と同じく神饌をお供えし、午前十一時、浜宮祭参列者に加え、江口区長、福岡県立少年自然の家玄

五月寮での直会

余滴

　内閣府が毎年行っている意識調査によると「国を愛する気持ちの程度」という項目は近年右肩上がりとなっている。約六割の方が「強い」としており、更には「国を愛する気持ちを育てる必要性」については約八割が「もっと育てるべき」と答えている▼この結果をどのように受けるかは様々であろうが、いわゆる愛国心の強い人が増えるということは、国への意識が高くなっているということであり、近年確かに日本古来のものに目が向き始めている兆候は感じられる。国の愛し方、また国の何を愛するかは人夫々という考えもあるだろうが、国柄に対する認識は共通であるべきであろう▼「古事記」序文には「古を稽（かんが）へて今を照らす」とある。古代から時代の文化の発展の為には過去を考え、その反省に立って今後の在り方を見通すべきであり、時代の道徳・風俗の衰えも古きからの伝統を考え、今日と対比して教えの基本とすべきというものである▼伝統や文化は守るものと教えられてきたが、これらを反古紙のように捨て去る今日の教えは早急に見直さなければならない。古の伝統を素直に見直し、地域の特性を守りながら、その大枠たる国家とは何なのかを真剣に考え直すときではないだろうか。当然かつての日本文明をそのまま再生することは出来ないが、我々が民族の神話や建国の歴史を学び、日本的価値観を共有したとき、将来の日本は違ったものになると信じる。（長）

神具・装束・授与品
井筒
装束店　〒600-8503　京都市下京区油小路通六条上る　フリーダイヤル　0120-075-980
福岡店　〒812-0068　福岡市東区社領1-12-10-401　フリーダイヤル　0120-055-092
授与品店　〒601-8348　京都市南区吉祥院観音堂町23　フリーダイヤル　0120-075-820

木組の家　匠の技
総合建築業　株式会社 弘江組
〒811-3406 福岡県宗像市稲元4丁目1-20 電話(0940)32-2567

海の家関係者ら地元の方々が多数参列される中、五月祭が斎行された。

祭典終了後、五月寮で直会が執り行われ、参列者一同連綿と受け継ぐこの祭典の大切さに心を寄せ、楢の若葉が敷かれた折敷に盛られた赤飯・がめ煮・膾・粽・ガメの葉饅頭を古式ゆかしく栗箸でいただきながら、神人和楽の一時を過ごした。

稲の成長を予祝する神事でもあるこの五月・浜宮祭が終わると、神郡宗像では田植えの準備が始まり、一面の水田に早苗が影を浮べながら夏へと木々も緑を深めていく。

五月祭

沖津宮・中津宮両宮 春季大祭斎行

～筑前大島で、五穀豊穣と豊漁を祈念～

旧暦の三月十四・十五日は当社沖津宮・中津宮の春季大祭であり、今年は四月二十三・二十四日がその日に当り、筑前大島の漁師は休漁し今年の豊漁を予祝、また遠来の参拝者多数によって敬虔な祈りが捧げられた。

この大祭に先立ち沖中両宮奉賛会、同敬神婦人部、同翼賛会による連日の奉仕により心字池の清掃、社殿や境内の装飾、または直会等の諸準備が整えられ、境内は清新な瑞気に満ちていた。

二十三日夕刻降雨の中、宵宮祭が沖津宮遙拝所と中津宮本殿において同時刻に執り行われ、翌日の両宮春季大祭の無事斎行が祈念された。

翌二十四日は、予報の通り小雨が早朝よりみられたが、午前八時半の宮崎区厳島神社春季大祭時には雨も上がりだし、厚い雲に覆われながらも降雨に見舞われること無く、同九時よりは島北側岩瀬の沖津宮遙拝所より海上約五十キロ先の沖津宮を遙かに拝し沖津宮春季大祭が、宮司の祝詞奏上に続き浦安舞が奏せられ、多数の参列者のもと滞りなく厳粛に斎行された。

同九時半、大島最高峰の御嶽山に鎮座する摂社御嶽神社の春季大祭が斎行、農協関係者と崇敬者が参列し今年の豊作も併せて祈願された。

そして午前十一時、中津宮に於いて春季大祭が斎行、この頃には九割降雨の予報を覆し、青空広がる中、髙向宮司以下神職・巫女、また氏子奉幣使が本殿へ参進。境内は島内外より多くの参拝者でうめられ、本殿前には大島の各漁船からの献魚をはじめ野の幸、献酒が供えられた。

髙向宮司の祝詞奏上に次いで、島の氏子を代表し奉幣使が祭詞を奏上、浦安舞の奉奏、沖中両宮奉賛会会長を始め、島の各種団体の代表者、また内陸各地からの崇敬者多数が玉串を奉り敬虔な祈りが捧げられた。引き続き髙向宮司より昨年の沖津宮・中津宮への献魚・献品多数奉納者十六名に感謝状と記念品が贈呈され、祭典は滞り無く厳粛の内におさめられた。

祭典終了後は照海殿に場所を移し、髙向宮司による御礼

奉納子供相撲

感謝状贈呈

氏子奉幣使　丸井義明氏（右）

挨拶に続き、氏子奉幣使の丸井義明氏による乾杯の発声で直会が始められた。

午後一時半よりは境内の土俵において、大島小学校全校児童三十四名による子供相撲が奉納された。同校教員・保護者に加え、直会に参列していた参列者も再び中津宮へ参り子供相撲を観戦、大勢の拝観者に児童たちも力が入り大熱戦を繰り広げた。境内には一番ごとに大きな歓声が響き渡り、大変な神賑わいをみせ、本年の沖津宮・中津宮の春季大祭は滞り無く盛大裡に幕を閉じた。

尚、大祭の諸準備に連日ご奉仕を頂きました沖中両宮奉賛会（会長＝沖西敏明氏）、同敬神婦人部（部長＝河辺恒子氏）、同翼賛会（会長＝遠藤三保氏）の皆様には紙面を借り篤く御礼を申し上げます。

海上安全大漁祈願祭 中津宮 龍宮祭斎行

去る五月三日、当大社中津宮の鎮座する筑前大島にて、大島漁師等の祭典「龍宮祭」が島の西南、津崎の浜に鎮まる龍宮神社、宮崎区の沖合いに浮かぶ小島に鎮まる宮崎龍宮神社にてそれぞれ斎行され、今年の海上安全・大漁が祈願された。

小型ボートでの上陸風景

この祭典は古くから漁神様として、漁民の厚い信仰のもとに続けられており、宗像神社史によると元禄五年（一六九二年）に龍宮祭斎行の記述があり少なくとも三百年の歴史を持っている。

当日、神職二名が中津宮へ出向、漁業関係者とともに、漁船にて津崎の浜に向い、さらに伝馬船（小型ボート）で浜に降りたった。浜に建つ石祠の前に神饌を供え、参列者等が整列し祭典開始。海上の安全と豊漁を祈り敬虔な祈りが捧げられた。

港に戻ると引き続き漁協の二階で直会が行われ、日頃の労苦を互いに労い、新たな漁への決意を新たに、明日への糧にした。

氏八満神社 春の例祭斎行

当大社が鎮座する田島地区の氏神様をお祀りする八満神社の春祭りが、四月二十一日田島区長をはじめ氏子の方々が多数参列する中、厳粛に斎行された。

当日、午前九時半、高向宮司と神職一名により出御祭が斎行され、御神璽が神輿へと奉安された。昨年は生憎の雨により御神幸は中止となったが、本年は晴天に恵まれ、田島区長をはじめ氏子等が列を組み児童がリコーダーの音色を響かせながら賑々しく御神幸を行い、御祭神を当大社・祓舎に設営された御旅所へお連れした。御旅所での祭典終了後、神門前へと進み、宗像大神様に拝礼し再び田島区域を御神幸、正午過ぎには田島公民館に到着し頓宮祭が斎行された。祭典終了後、和やかに直会が行われた。午後二時には直会を終え、御神璽を本殿へとお返しする還御祭を斎行、本年の春祭も恙なく終える事ができた。

祭典が終了すると、無事に終えた安心からか、氏子の方々から笑みがこぼれており、皆の地域の氏神に対する篤い崇敬の念が伺えた。

また、祭典時には次世代を担う子供達の姿も目にしたが、日本の原風景とも言えるこういった祭礼を継承することが、地域の結束を高め文化を育むことであろう。是非この伝統ある地域の祭礼を子々孫々まで継承していただきたい。

駐輦所祭（宗像大社）

御神幸出発（氏八満神社下）

平成25年度

宗像大社奨学金受給生奉告祭

第五十四期を迎え、受給生は延べ八七四人に

四月二十九日（昭和の日）、奨学金受給生奉告祭が斎行され、本年度の受給生がご神前に参集した。尚、今年度の新受給生二十名で第五十四期生となり、延べ人数は八七四人にのぼる。

当日は宗像・福津両市内より受給生約六十人が保護者とともに参集。午前十一時からの昭和祭に参列後、拝殿に昇殿し奉告祭が斎行された。有為な人材になる事を御神前に誓ってくれた事と思う。

祭典後は清明殿で選定書授与式と説明会が行われ、髙向宮司から宗像大社奨学金選定書が生徒の代表に授与され、担当神職よりこの奨学金の歴史、制定目的、規定、受給方法等についての説明が行われた。

その後、生徒一人一人がテーマに沿った作文を執筆し、書き終えた生徒から奨学金支給を受け、境内をあとにした。（この作文は『奨学生作文の御紹介』として紙面で掲載します）

当大社の奨学金制度は、昭和三十四年の今上陛下御成婚を奉祝して制定され、翌年の昭和三十五年第一期生として宗像市・郡内の中学校出身者（当時は六中学校）に支給され今日に至っている。現在では宗像・福津市内十中学校より各校二名ずつ選定し三年間支給している。

54期生　20名

選定書授与式（清明殿）

昭和祭

昭和祭にて玉串拝礼を行う新受給生

仁和寺門跡に

鎮国寺名誉住職 立部祐道氏 選出

真言宗御室派の総本山「仁和寺」（京都府）のトップ「門跡」（第五十世）に当大社の神宮寺として栄え、縁深い鎮国寺の名誉住職立部祐道氏（七十三歳）が選出された。

仁和寺は平安時代の仁和四年（八八八）に落成。平成六年（一九九四）には「古都京都の文化財」の一つとして世界文化遺産に登録されている。

門跡の選挙には、立部氏と現職の南揚道氏（八十一歳）が立候補し、四月十八〜五月七日に全国の御室派の僧侶約九〇〇人が投票、八日に開票し選出された。六月二十三日から五年間の任期を務めることとなった。

立部氏は広島県尾道市出身。龍谷大文学部を卒業、鎮国寺住職、宗像青年会議所理事長、門跡に次ぐ地位の「執行長」などを歴任された。義父は第三十四世門跡の故瑞祐氏。

同氏益々のご活躍をお祈り致します。

宗像大社奨学金第54期受給生20名

沖西　岳斗	（大島）	福工大付属城東高
遠藤　花	（〃）	香椎高
石橋　政也	（玄海）	福工大付属城東高
高橋真美子	（〃）	古賀竟成館高
横町　美咲	（日の里）	宗像高
原武　美鶴	（〃）	宗像高
原田　健太	（宗像中央）	香椎工業高
内田　悠奈	（〃）	福工大付属城東高
松井祐太朗	（城山）	福工大附属城東高
中村　早希	（〃）	東海大付属第五高
多良木さくら	（河東）	古賀竟成館高
木村　晴奈	（〃）	玄界高
吉永　裕基	（自由ケ丘）	遠賀高
早川　華	（〃）	博多高
萩原　陸	（津屋崎）	水産高
石津　温子	（〃）	古賀竟成館高
辛川　広光	（福間）	光陵高
上野　綾香	（〃）	光陵高
花田　魁	（福間東）	水産高
藤原はづき	（〃）	光陵高

平成25年度

宗像大社 氏子青年会定例総会開催

五月十五日、宗像大社氏子青年会定例総会が小林栄二会長以下約二十名出席のもと当大社斎館にて開催された。

神宮並びに皇居遥拝、国家斉唱、敬神生活の綱領唱和を行い小林会長、高向宮司より挨拶を頂戴した。議事は井浦会員を議長に、平成二十四年度活動並決算報告、監査報告、役員変更の件が審議され、承認を得ると、引き続き平成二十五年度の活動計画案、予算案についても一同より承認を得た。活動案では全国氏子青年協議会に加盟し、会としての活動を活発化させていくことなども審議され、会員等もこれに協力し、今まで以上に飛躍の年にしようと決意新たに総会は終了した。

新役員

写真

会長	嶺 俊光（中央）
副会長	郭 郁三（右）
〃	田村 政則（左）
理事	中野 順
〃	安部 芳英
〃	古賀 智己
〃	井浦 潤也
〃	永島 史章
〃	榊 一明
〃	安井 貴之
〃	堀江 裕明
監事	矢原 吉房
〃	権田 健一

第13回宗像大社氏子青年会 沖ノ島清掃奉仕

去る四月二十七日、宗像大社氏子青年会（会長＝小林栄二氏）会員ら約四十名が沖ノ島へ渡島、清掃奉仕を行った。

この清掃奉仕は、年に一度五月二十七日に約二五〇名に及ぶ一般参拝者を受け入れる「沖津宮現地大祭」にあたって実施され、本年で十三回目となる。

前日まで荒れた天候であったが、当日は晴天に恵まれ波も穏やかになり、午前八時に鐘崎港を出港、海上を進むこと約二時間で沖ノ島へ到着。直ちに海中で禊を行い、島の中腹に鎮座される沖津宮へ向かった。

沖津宮にて奉告祭を斎行した後、葦津禰宜より挨拶・説明があり、奉仕作業を開始。本殿裏に長年堆積した土砂の除去作業を中心に、社務所外壁の塗装補修、海岸へ漂着したゴミの清掃等が進められ、平素勤務している一名の神職では困難な作業を約二時間御奉仕頂いた。

奉仕後は一同波止場で直会を行って労い、帰路は沖ノ島を一周し幽玄な景観を拝しながら夕刻には鐘崎港へ無事到着、本年度の奉仕作業を無事終えた。

宗像大社春季奉納盆栽展

第三十回宗像大社春季奉納盆栽展が、五月三日～六日の四日間にわたり優美な黒松、五葉松、紅葉など多くの盆栽が本殿西側の境内に並べられ、見事に開催された。

この盆栽展は、毎年春と秋（年二回）に開催され、神郡宗像の各地区（宗像・津屋崎・福間）の盆栽愛好家が、「宗像大社の御神徳の発揚に努め、併せて会員相互の親睦を計り、日本の伝統と格調高き美を遺憾なく表現出来る盆栽の普及盆栽技術の研鑽に励み、盆栽発展の一助とする」ことを目的に、宗像大社奉納盆栽会（現会長＝石松重敏氏）を結成し今日に至っている。

開催中は、快晴に恵まれ盆栽も日の光を受ける事により瑞々しく青々と映え、参拝者に心地よい静寂な一時を与えていた。

平成25年度 主基地方風俗舞保存会 総会開催

五月十七日午後六時より、平成二十五年度主基地方風俗舞保存会総会が会長花田安輝氏以下役員会員十五名出席のもと当大社斎館にて開催された。

始めに、主基地方風俗舞保存会の舞歌(破・急)を出席者全員で奉唱し、会長より挨拶を頂いた後、議事に入り、平成二十四年度活動報告並び決算報告、引き続き平成二十五年度活動計画案並びに予算案報告を行い、一同より承認を得た。

主基地方風俗舞は昭和四年に当大社に下賜されて以来、昭和五十二年までは当大社と地元青年団、同五十三年からは保存会を発足し、伝承され今年で「八十三年」。福岡県指定無形文化財認定条件の一〇〇年まで、あと十七年である。しかし、保存会発足当時八十名いた会員も、現在では約半数の四十名程に減少している。会員一同この現状を打破するべく、若手会員獲得の意を新たに結束を誓った。

昭和4年4月14日　初めて披露される主基地方風俗舞

研修旅行記

四月二十二・二十三日の両日、宗像大社主基地方風俗舞保存会平成二十四年度研修旅行が花田安輝会長以下役員七名参加のもと開催され、担当神職二名が引率し大阪・京都へと向かった。

一日目、大阪に着いた一行は、「住吉大社」にて正式参拝。神職より御由緒や境内を御案内いただき、「海の神」住吉大社と、「海上の神」当大社とのつながりなどを感じることができた。その後は大阪市内各所を見学し、夕食の懇親会では風俗舞の思い出話などに花が咲き、話尽きぬまま大阪の夜は更けていった。

二日目は京都へ向かい、松尾大社と嵐山に鎮座する櫟谷(いちいたに)宗像神社を参拝。その後、京都市内各所を散策し京都独特の風情を楽しんだ一行は帰途に着いた。

今回の研修を終え、歴史や文化の継承の大切さを再確認し、今後宗像大社主基地方風俗舞の継承維持に意気込みを見せた。

住吉大社にて

宗像大社菊花会 玄海小学校・玄海中学校に菊資材を贈呈

五月十日、宗像市立玄海小学校体育館にて、今年で十四年目となる恒例の菊資材贈呈式が行われ、三~六年生までの児童六十三名の前で、当大社菊担当の神職・巫女から児童代表へ菊資材が手渡された。

同校では情操教育の一環として菊作り栽培に取り組んでおり、地元ボランティア団体「匠の会(会長=小並範義氏)」を始め、地元・PTA・教諭一丸となって支援している。この趣旨に宗像大社菊花会も賛同し、菊鉢や肥料などを寄贈している。

同校は、宗像市の施策により本年四月から施設一体型小中一貫教育実施校となり、玄海中学校横に新設された校舎で新学期がスタートしている。菊資材保管用倉庫なども完備された新校舎で菊作りは行われる事となり、三・四年生は小菊、五・六年生は大菊を栽培し、また、新たな試みとして中学一年生も菊作りを始める予定である。

生徒たちは、夏休みにも交代で登校し水かけなどを行い、菊花の世話を通して命の大切さやおもいやりの心を学ぶ事となる。奇しくも今年は玄海小学校設立五十周年の節目の年となり、同校ではさまざまなイベントが企画されている。

その中で秋には校内菊花展を開催すると共に、宗像市役所や宗像警察署そして当大社で行われる西日本菊花大会にも、小学生・中学生が丹精込めて作った菊が出品される。個性豊かな菊花がこの神郡宗像を彩る秋が待ち遠しい。

(続) 海の寄物 278

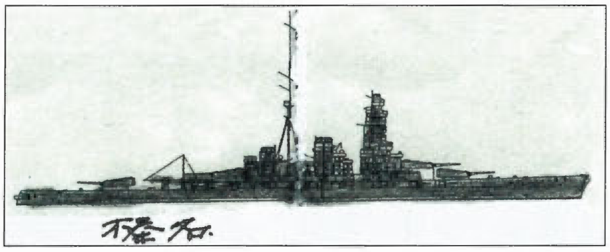
いしいただし

福岡市東区の筥崎宮に「軍艦榛名」の絵馬があるというのは、福岡市教育委員会が発行している「福岡市の絵馬」で知っていた。一度見たいと思っていたので、筥崎宮の田村邦明権宮司に電話をかけ許可を受けたので、五月五日に訪ねた。この日は子供の日で、しかも西日本最大といわれる骨董市が参道で行われ賑っていた。

絵は回廊の一番奥に揚げられていた。威風堂々とした艦姿に興奮した。絵馬は縦一一七cm、横一九二cm、大型で中央に戦艦榛名、マストには海軍大将旗がひるがえている。波の色、空等は明るさのとぼしい色調は戦局の厳しさを暗示しているようにも思えた。艦が中央に、右上に筥崎宮の鳥居(黒田長政建立の慶長十四年の筥崎鳥居)その奥に楼門(伏敵門)が描かれている。絵馬の説明には「戦艦榛名はるなの勇姿、太平洋戦争のさなか、第三艦隊所属戦艦榛名乗員の福岡県出身将士が相謀って筥崎八幡宮に武運長久祈願のためにこれを画家に託して描かせ奉納されたものである」画題「太洋を祓ふ」昭和十八年奉納、画家花岡萬舟作とある。

榛名は金剛型四隻(金剛、比叡、榛名、霧島の金剛級巡洋戦艦の第三番艦で、建艦当初は第二号装甲巡洋艦であった。榛名は民間の神戸川崎造船所で建造された最初の主力艦である。数次の改装がされたが基準排水量三二、一五六トン、全長二一九・六一m、速力三十・五ノット、主砲三十六cm×八門、副砲十五cm×十六門、高角砲十二・七cm×八、高角機銃二十五mm×二十挺、搭載機三である。金剛型戦艦は高速戦艦として日本の戦艦十二のうち三十ノットの速力がある。

戦歴は野沢正の「日本軍艦一〇〇選」(秋田書店)では太平洋戦争に突入し、南雲艦隊の直衛に始まり、南太平洋、インド洋、ミッドウェーとその高速をいかして縦横無尽の活躍をしたが、ソロモン沖海戦を経て有名なガダルカナル島飛行場砲撃に僚艦「金剛」とともに大戦果をおさめた。その具体的な戦果は両艦で各種三十六cm砲弾九一八発を撃ちこみ、滑走路をズタズタに破壊、また約百機の飛行機が半数以上破壊され、どうにか飛べるかは戦闘機三十五機、急降下爆撃機七機だけだったし、米兵四十一人が戦死し、多数が負傷している。米軍戦史にはこの時の様子を「恐怖の一夜」「飛行場全体が火の海と化す」と記されているという。(戦艦入門・佐藤和正著)



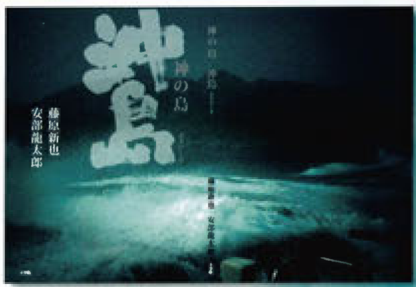
「戦局は日増しに不利となり、アメリカ艦隊は破竹の勢いでフィリピンにせまった。これを迎え撃ったわが海軍の最後の大海戦が捷一号作戦・通称レイテ湾海戦である。ここで至宝「武蔵」を失ない、榛名は僚艦金剛とともに史上名高いレイテ沖の大進撃戦を遂行した。

この時は、機関の不調で金剛ほどの戦果をあげることは出来なかった」(前揚野沢正)つづく。

小学館より新刊紹介

神の島 沖ノ島(おきのしま)

藤原新也・安部龍太郎著



現代を代表する写真家で作家の藤原新也氏と「等伯」で直木賞を受賞された安部龍太郎氏、二人の眼と心に映った沖ノ島、それが融合した神々の息吹を感じさせる異色の一冊です。

(小学館刊行 定価2,940円 税込)

第六二二回 宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日〆切

宗像市 土穴 山本静子
埋蔵の人骨にはた洗濯物にDNAの存在を知る
評 人骨や洗濯物からDNAが検出できると驚く作者。結句は〈〜するとぞ〉などと。

福津市 若木台 山崎公俊
うぐひすの鈴鹿か伊勢かと空想す宣長翁の山桜とは
評 本居宣長の歌〈〜朝日に匂ふ山桜花〉を考察し楽しむ作者、宣長は山桜と鈴を愛した。

うきは市 浮羽町 向 則正
春浅き家の巡りに鶯のととのふ声で鳴き終日聞ゆる
評 季節感がある。下の句を〈ととのふ鳴き声終日聞こゆ〉としては。

宗像市 日の里 秋吉嘉範
友つれて社の若葉匂いつつ神宝館で偲ぶは古代
評 爽やかな歌。初句〈友と来て〉三句〈匂いたつ〉結句は順当に〈古代を偲ぶ〉に。

北九州市 八幡西区 豊田光子
断ちがたき夫の祥月降る雪は音なきままに春の匂ひす
評 ご主人を強く恋う作者。二〜四句を〈夫への思ひよそに降る祥月の雪〉としてみた。

福津市 若木台 野間精一
早堀のタケノコを貰ひたり妻が糠入れゆがく音する
評 到来物の筍を茹でる気配に、高まる期待。字足らずなので二句に〈太き〜〉などと入れては。

北九州市 戸畑区 田中ハツセ
ピンクの八重バラの様なるこの椿吾さし木して幾年過ぎしか
評 過ぎた時への思い。語順を替え〈幾年の過ぎしやピンクの薔薇のごと咲くこの椿挿し木してより〉としてみた。

福津市 中央 池浦千鶴子
蓬など萌えて荒れたる畑に出て薹立ち前の大根を引けり
評 忙しくて手入れのできなかった畑だろうか、薹立ち前が効いている。結句は〈〜を引く〉。

宗像市 田久 巻 桔梗
うつくしき舗道はおほき抱かせ石いちやうは無実を訴へをらむ
評 人間には快い舗装も公孫樹には負担が大きい、公孫樹を罪人に喩え同情する発想が個性的。

宗像市 池田 森 龍子
百歳の母が女の顔見せりクリーム塗りて鏡持たせば
評 たとえ百歳でも母も女性、作者には意外だったのか。三句は〈顔になる〉に。

福岡市 南区 井田有久衣
眞夜中にふと眼ざめればゴミ収集車の音に夢路破らる
評 意味の似た言葉を一つにし、〈真夜中に夢路やぶらるゴミ収集車来たりて仕事するその音に〉。

宗像市 日の里 大和美由紀
春風にさらさらさらと音奏で篠竹揺るる山道歩く
評 竹の葉の磨れる音が美しい。結句は〈音を奏でる〉、または〈篠竹揺れる〉としたい。

福津市 星ヶ丘 佐々木和彦
どうしても音のくもりてしまうゆえテネシーワルツますますかなし
評 思い出の曲だろう。上の句〈レコードの古くて音のくもるゆえ〉としてはいかが。

◆選者詠
訪れを待ちてをりしと言ひくれし言葉灯れり別れ来たりて
あらあらと雨降り出しし街角にいづこより来る鰻焼く香は

第五九五回 俳句作品集

宗像市 田禮 早川祥三
蓮華田を丸く食む山羊日向紋

宗像市 日の里 花田いつ枝
春夕焼遂に消へたり水平線へ

6月祭事暦

1・15日 月次祭
午前10時〜
高宮祭
第二宮・第三宮祭
引き続き
宗像護国神社祭
月命日祭(1日)
巡　拝(15日)
午前11時〜
総社祭
浦安舞奉奏(1日)
豊栄舞奉奏(15日)

編集後記

富士山の世界文化遺産登録告知の報道を受け、県や市に推進室が置かれ世界遺産登録を目指す、当大社沖ノ島の取材が増えている。各メディアにより認知度があがるのは良いことであろう。しかし、沖ノ島のみが取り上げられることにより、総社である辺津宮と中津宮は置き去りにされ、「沖ノ島の一人歩き」になっているのが実状である▼「三宮一体」「三宮同格」を旨とする宗像大社。このことをどう理解してもらうのか、又、露出する沖ノ島の尊厳をどのように護持していくのか、神職としても、広報課員としても命題である▼旧暦六月は「水無月」諸々由来はあるが、「水」に関する月であることは間違いなさそうだ。「水」といえば、当大社中津宮には延命招福の霊泉「天ノ真名井」と呼ばれる名水が湧き出ている。古来よりこの水を飲めば長生きし福を授かると言う▼汗かく陽気となりました。喉が乾いたら是非、中津宮に…
（鈴）

発行所 宗像大社社務所・宗像会
住所 〒八一一―三五〇五 福岡県宗像市田島二三三一
電話 （〇九四〇）六二―一三一一（代）
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延・鈴木祥裕
制作・印刷 ゼネラルアサヒ
毎月1日発行
定価1年送料共 1,000円